

台湾語の“來去 (LÂI-KHÌ)” の概念と意味

劉 綺 紋

1. はじめに

前稿(劉綺紋 2016)で述べたように、“來”(來る)と“去”(行く)という二つの動詞は、中国語にも台湾語にもあり、しかもそのプロトタイプの用法から多くの拡張した用法まで、中国語と台湾語とで共通するものが多い。しかし、“來”と“去”が組みあわさった“來去”という表現の意味や用法については、中国語と台湾語とでは異なっている。

現代中国語の“來去(láiqù)”の例は、例えば次のようなものがある。

- (1) a. 來去匆匆。(來るのも去るのも慌ただしい。行動が慌ただしい。)
- b. 來去無蹤。(來るのも去るのも早い / 神秘的である。行動が早い / 神秘的である。)
- c. 來去自如。(來るのも去るのも自由自在である。行動が自由自在である。)
- d. 紅塵來去一場夢。(浮世に來るのも去るのも夢のようだ。人生は夢のようだ。)

これらの中国語の“來去”の多くは、空間的意味と比喩的意味という二つの解釈が可能であり、一つの発話の中で前者と後者の意味を同時に表す用法もある。例えば、(1a-c)がそうである。一方、(1d)では“來去”は“紅塵”(浮世)、“夢”(夢)などの比喩的な表現と共起しているため、比喩的意味としてのみ解釈される。

これらの“來去”が空間的意味を表す場合、“來”は「來る」という物理的移動、“去”は「行く」や「去る」という物理的移動を表している。一方、比喩的意味を表す場合、“來”と“去”の移動の意味はどちらも空間領

域から〈行動〉や〈人生〉などの抽象的な社会的領域や経験的領域へとメタファー的に写像することによって理解される。¹

一方、台湾語の“來去 (lâi-khi)”の意味については、台湾教育部(2011)『臺灣閩南語常用詞辭典』では、次のように説明している(閲覧日:2015/02/17, 2016/03/11)。²

A. 動詞。ここから離れる(“離開此處”)。合音は“laih”と読む。

例：我 beh 先來去--矣。(我要先離開了。用於表示告辭。)(私はお先に失礼します。別れを告げることを表すのに用いる。)

B. 動詞。行く・どこかへ向かって行く。一人称あるいは一人称を含んだ場合の動作の意志・願望を表すのに用いる。(“去、前往。用於表

¹ インターネットで“來去”を検索すると次のような例が最も多くヒットする。“來去鄉下住一晚”(田舎へ行って一晩泊まろう)(http://www.goldsuntv.com.tw/program_deils.php?n_id=6、閲覧日:2016/02/29)、“來去逛夜市”(夜市をぶらつきに行こう)(<http://ycchen2100.pixnet.net/blog/post/26772709-來去逛夜市>、閲覧日:2016/03/30)、“走!來去偏鄉義築”(行こう!辺鄙な田舎へボランティアで建築の仕事をしに行こう)(<http://2016projectreview.arch.nctu.edu.tw/activities/zou-lai-qu-pian-xiang-yi-zhu>、閲覧日:2016/03/30)など。検索した限り、このような例はいずれも台湾のホームページである。ただしその多くは台湾語ではなく、現代中国語で書かれている。なぜそう言えるかと言うと、これらの例における“鄉下”(田舎)、“逛”(ぶらつく)などの語彙はいずれも中国語の語彙であり、台湾語の語彙ではないからである。また、最後の例における“走”の用法は台湾語の“走”とは異なるし、そのURLには中国語の発音を表すピンインが書かれている。しかしながら、それらの“來去”は「～へ行こう」という意味で使われており、その意味は現代中国語の“來去”にはなく、台湾語の“來去”にはある。台湾では、台湾語にしかない表現だと意識しつつ、それをあえて現代中国語の文章の中に入れて、その中国語が台湾から発信されているのだということを意図的に表現することが多い。上記の“來去”の例もそうである。

² 本稿の台湾語文の表記は、“漢羅臺文”(台湾語の書写法としての漢字とローマ字の交じり書きであり、“漢羅”と略称)を用いる。特に説明しない限り、その漢字・ローマ字の表記はいずれも教育部(2011)に基づく。例文の訳については、出典が教育部(2011)の例文の中国語訳はそれに基づくが、それ以外の中国語訳・日本語訳は筆者による。例文の下線も筆者による。

示第一人稱或包含第一人稱的動作意願。”) 合音は“lái”と読む。

例 (i) : 咱來去看電影好--無? (我們去看電影好不好?) (私たちは映画を見に行かない?)

例 (ii) : 我beh來去逛街。(我要去逛街。)(私はちょっと町をぶらつきに行く。)

C. 動詞。行き来する。人と人が付き合うことを指す。(“來往。指人與人之間的交往互動。”) この用法には合音はない。

例：我佢伊已經真久無來去--矣，毋知影伊ê情形。(我和他已經很久沒來往了，不知道他的情況。)(私はもう長い間彼と付き合いがないから、彼の状況を知らない。)

以上の三つの意味のうち、Cは比喩的意味であり、「行ったり来たりする」という“來”と“去”の物理的移動の意味が、空間領域から社会的領域へとメタファー的に写像することによって理解される。それは、前掲(1)の中国語の“來去”の例の比喩的意味とは異なるものの、“來”と“去”のメタファー的に拡張された意味であるという点で同様である。

本稿の目的は、教育部(2011)のA「ここから離れる」とB「行く・どこかへ向かって行く」について再検討し、“來去”の概念および意味を明らかにすることである。具体的には、以下の三点について考察する。

まず一点目は、さまざまな統語構造において具現化された“來去”の意味を確認することである。教育部(2011)のBの説明を見る限りでは、“來去”によって述べる移動は空間上の何らかの到着点へ向かう移動であるように思われる。しかし一方では、そこで挙げている例文において、“來去”は単に空間的到着点へ向かう移動というよりも、むしろ次の行動を行うための移動を述べている。例えば“咱來去看電影好--無?”は「映画を見る(“看電影”)」ために移動し、“我beh來去逛街。”は「町をぶらつく(“逛街”)」ために移動する。

このように説明と例文が微妙にずれているのは、“來去”が置かれる統語構造によってその解釈(interpretation)が異なることがあるからだと考えら

れる。そこで第2節において、“來去”が使用されているシンタックスを整理し、統語構造と“來去”の意味との関係について考察したい。

次の二点目は、“來去”が使われる発話のタイプについて観察し、“來去”の概念を明らかにすることである。劉綺紋(2016)で見たとおり、「ここ(出発点)から離れる」という物理的移動を表す“來去”が使える発話は勧誘・意志の発話に限られる。³ 例えば、次の(2a)で“來去”が使えないのは、トラジェクターの近未来の移動を推測して述べているからである。一方、(2b)では発話者からの勧誘について、(2c)では発話者自身の意志について述べているため、“來去”が使えるのである。

- (2) a. 無的確仔 hia-ê 人 今仔日 tō 會對 tsit ê 所在 {? 來去 / 離開} --ah. ⁴ (説不定那些人今天就要從這個地方離開了。)(あの人たちは今日にもこの地から離れるかもしれない。)
- b. 行・咱來去! (走・咱們走吧!)(行こう、私たちは行こう!)
- c. 歹勢 --neh, 我先來去 --honnh. (不好意思呀、我先走了啊。)(すみませんね、私はお先に失礼しますね。)

この、勧誘・意志の発話にしか現れないという点が、“來去”の概念内容

³ 劉綺紋(2016)で見たように、“來去”が使われる発話は、勧誘の典型事例と意志の典型事例の他にも、勧誘と命令の中間事例や、勧誘と意志の中間事例や、勧誘と依頼の中間事例などがある。それらの中間事例はいずれも勧誘に関わる事例であるため、“來去”の発話を勧誘と意志の二種類に大別した(2.3節、第3節後述)。ただし、“來去”の発話には勧誘と意志の中間事例がしばしば見られることから分かるように、“來去”の概念における勧誘と意志の意味は両立しないものではなく、連続性を持っているのである(3.3.4節参照)。

⁴ その音節が「軽声」という声調で読むことを示すために、教育部(2011)ではその音節の直前にダブル・ハイフン“--”を付けると規定している(閲覧日: 2016/03/13)。台湾語の音韻構造において、後続音節があるとその直前の音節は基本的に変調(tone sandhi)が起きる。ただし後続音節の声調が軽声ならば、先行音節に変調が起きない。また、後続音節が軽声かどうかで意味が変化することもある。例えば、“過去”を“kuè-khi”のように、後続音節“去(khi)”を元の声調で読むと、「過去・昔」という時間的意味を表す。一方、“kuè--khi”のように、後続音節“去(khi)”を軽声で読むと、「過ぎて行く」という空間的意味を表す。

を理解する非常に重要な手掛かりなのではないかと考える。すなわち、勧誘・意志の意味は“來去”の概念自体に内在し、“來去”の概念は、〈出発点から離れる / ~へ向かって行く〉などの物理的移動)に〈勧誘・意志〉の意味が加わったものであり、つまり、「出発点から離れよう / ~へ向かって行こう」というようなことを表す、ということなのではないかと考える。もしこの仮説が成立するならば、“來去”は「ここ(出発点)から離れる」という移動を表す場合のみならず、「~へ向かって行く」という移動を表す場合も、勧誘・意志の発話にしか現れないはずである。そこで次の第2節では、さまざまな統語構造における“來去”の意味を検討する際、“來去”が使われる発話のタイプも併せて考察する。

三点目は、“來去”の発話と主語の人称との関係を明らかにすることである。教育部(2011)は、“來去”のBの意味について、「一人称あるいは一人称を含んだ場合の動作の意志・願望を表すのに用いる」という説明を付け加えている。この点について、盧廣誠(2011)ではさらに一人称を含むことを主語に限定し、「“來去”の主語は必ず一人称であるかあるいは一人称を含む」と述べている(p.253)。しかし例えば、次の例文(3)に示されるように、“來去”の主語は必ずしも一人称を含むとは限らないし、“來去”によって二人称・三人称の意志・願望を述べることができる。

(3) a. 你來去海墘仔--honnh? (你和我一起去海邊吧?) (あなたは私と一緒に海邊に行くんでしょう?)

b. 伊 mā 想 beh 來去 tshuē 淡水阿媽--lah。(他也想要和我一起去淡水奶奶啦。)(彼も私と一緒に淡水のおばあさんを探しに行こうとしているよ。)

実は“來去”によって意志・願望を述べることは、主語が何人称であろうとできるのである。ただし興味深いことに、その主語の人称によって“來去”の意味が異なるという現象が見られる。そこで第3節では、“去”と比較しつつ、この点について論じたい。

2. “來去”の意味と概念について

本節では、“來去”が現れるシンタックスを大きく五種類に分け、それぞれの“來去”の意味を確認する。さらに、“來去”が使用される発話のタイプを観察し、“來去”の概念について考察したい。できるだけ客観的に観察するために、その考察にあたってはなるべく作品の中で実際に使用されている用例を用いることとする。

2.1. “來去”に場所目的語のみが後接するシンタックス

この統語構造の例として、次の例文を見てみる。

- (4) a. 來去！來去！來去！來去！咱來去夏威夷！（走吧！走吧！走吧！走吧！咱們一起去夏威夷！）（行こう！行こう！行こう！行こう！僕らは一緒にハワイへ行こう！）（夏威夷）
- b. 海水鹹鹹，日頭炎炎，今仔日咱 beh 來去剃頭店。（海水很鹹・太陽很大，今天咱們要去理髮店。）（海水は塩からくて、太陽はガラガラ。僕らは今日散髪屋に行くんだ。）（夏威夷）

この二つの例文はいずれも、デュオグループ“金門王&李炳輝”が歌った“來去夏威夷”（ハワイへ行こう）という歌の中の歌詞である。歌の冒頭では、まず(4a)の四回の“來去”によって「行こう！行こう！」と声を掛け合い、続いて“咱來去夏威夷”という、“來去”に場所目的語が後続する歌詞により、その目的地がハワイであることを歌っている。⁵ 五回の“來去”はいずれも自らの行く意志を述べながらも、互いに相方を誘う意味を表しており、これは意志と勧誘の中間事例だと言えるだろう。

次に前掲(4b)は意志の発話である。“來去”で意志を述べる場合、この例文のように主語の願望・意欲・決意などを表す助動詞“beh”と共起することが多い。⁶ この例文において、“來去”に“剃頭店”（散髪屋）という目的地が後接し、「散髪屋へ行こう」ということを表している。

このように、この二つの用例では、“來去”の後に場所目的語のみが続き、その目的地（到着点）へ向かって物理的移動を行う意志や勧誘を表し

ており、つまり「どこかへ向かって行こう」という意味を表している。

2.2. “來去”が連動文の前項動詞として用いられるシンタックス

中国語と同様に、台湾語にも連動文構文がある。典型的連動文は、一つの主語に対し、二つ以上の動詞が連なって使われる構文である。しかも、それらの動詞の順番は、それらの動作が行われる時間順になっている。まず、連動文構文のこれらの特徴について、次の二つの例文で確認したい。

(5) a. 阮騎腳踏車去烏山頭水庫。(我們騎自行車去烏山頭水庫。)(私たちは自転車に乗って烏山頭ダムへ行く。→私たちは自転車で烏山頭ダムへ行く。)

b. 阮去烏山頭水庫騎腳踏車。(我們去烏山頭水庫騎自行車。)(私たちは烏山頭ダムに行って自転車に乗る。→私たちは自転車に乗り烏山頭ダムに行く。)

この二つの例文の主語の指示対象はいずれも動作主(トラジェクター)の“阮”であり、これらの“阮”は聞き手を含まない一人称複数人称代名詞である。⁷“騎(腳踏車)”((自転車に)乗る)と“去(烏山頭水庫)”(烏山頭ダムへ)行く)という二つの動詞(動詞句)は、いずれも動作主の行

⁵ 元の歌詞は“咱來去 go to 夏威夷”であり、英語歌詞“go to”が挿入されていたが、本稿では分かりやすくするために英語“go to”を省略した。また、本稿で引用した用例の出典は、歌やCDブックなど音声がある場合で、もしその音声が歌詞カードなどの印刷物と一致しないならば、本稿末尾の用例出典欄に挙げているアルバムなどの中に収録された音声に準拠する。印刷物に依拠しない理由は、劉綺紋(2016)でも述べたように、台湾語の正書法がまだ確立されていないため、印刷物における台湾語文の表記が音声と完全には一致しないものが多いからである(劉綺紋2016: 138)。ただし、検索しやすくするために用例出典欄における作品タイトルおよび、用例末尾のカッコ内における作品タイトルの略記号は印刷物通りの表記にする。なお、句読点については、歌詞カードには句読点がないためいずれも筆者による。本の句読点も修正することがある。

⁶ この意味を表す“beh”の品詞については、教育部(2011)や村上(2007)などは動詞としている(教育部(2011)の閲覧日:2016/05/08)。本稿ではその統語的役割により、盧廣誠(2003)に従い助動詞とする。なお、手元にあるその他の台湾語辞書(例えば陳修2000、盧廣誠2011など)にはいずれも品詞が記されていない。

動を表している。(5a)と(5b)の相違点は、動詞句の順序が逆だという点である。それにより、それぞれの行動の時間順も逆になっている。(5a)において、まず自転車に乗るという方法を使って、それから烏山頭ダムという目的地へ行く、ということを述べている。それに対し(5b)では、まず烏山頭ダムという場所に行き、それからサイクリングをする、ということ述べているのである。

次に、“來去”が連動文構文の前項動詞として使われている用例を見てみる。以下の例文も歌の歌詞である。

(6) a. 若是無聊 *tīo* 來 *tshue* 我，咱 *tsiah* 做伙來去唱歌。(如果無聊就來找我，然後咱們一起去唱歌。)(退屈なら私のところに来て、それから私たちは一緒に歌いに行こう。)(一首歌)

b. 我 *beh* 來去臺北拍拚！聽人講啥物好空 *ê* 攏佇 *hia*。(我要去臺北奮鬥！聽人家說什麼賺錢的機會都在那兒。)(僕は台北に行って頑張りたい！そこに儲かるチャンスがいっぱいあると聞いたから。)(向前走)

(6a)の主語として用いられる“咱”は、聞き手を含む一人称複数の人称代名詞である。“咱……來去唱歌”という連動文において、“來去”の後に直接“唱(歌)”((歌を)歌う)という動詞句が続いているため、「私たちは……まず行って、それから歌を歌う」という順序で行動することを表している。この歌詞は、発話者が退屈な人を誘って一緒に歌を歌いに行こうと勧誘している。なお、この歌詞の“做伙”は「いっしょに」という意味を表す副詞である。近い意味を表す表現は他にも“做陣”(いっしょに)、

⁷ “阮”は通常聞き手を含まない一人称複数人称代名詞として用いられるが、一人称単数人称代名詞の用法もある。その際、もう一つの一人称単数の人称代名詞“我”より丁寧になるため、詩、歌や芝居などで多用される。なお、人称も用法も異なるが、フランス語では、二人称単数の人称代名詞として使う際、もともと単数形の“tu”より、本来は複数形の“vous”のほうが丁寧である。この点で台湾語の一人称単数人称代名詞の“我”と“阮”の使い分けと通じるところがあると言える。単数の指示対象を表すのに複数の人称代名詞を使ったほうが丁寧なのは、焦点をぼやけさせることと関係があるのではないかと思われる。

“鬥陣”（いっしょに）、“同齊”（同時かつ一緒に）、“相招”（誘い合って）、“相tshuā”（連れ合って）、“相約”（約束し合って）などがあり、いずれも“來去”と相性がよく、“來去”と共起することが多い。それは、“來去”が「相手を誘って自分といっしょに行こう」「自分は仲間といっしょに行こう」など、複数の人間がともに移動しようとする発話で使われることが多いからである。この点も、“來去”の概念が勧誘や意志と関わっていることを暗示しているだろう。

次に前掲（6b）の“我beh來去臺北拍拼”という連動文において、まず“來去”の直後に“臺北”（台北）という場所目的語が続き、その後さらに動詞“拍拼”（頑張る）が続いている。それにより、「台北に行って、頑張る」という順に行動することを表している。さらに、これは発話者の意志・決心を述べる発話であり、やはり主語の願望・決意を表せる“beh”と共起している。

このように、“來去”が連動文の前項動詞として用いられる場合、それに後続するものは、〈場所目的語＋動詞（動詞句）〉の場合も、〈動詞（動詞句）〉のみの場合もある。前者の場合、「まず場所目的語によって示される到着点へ行き、それから後項動詞の行動を行う」という物理的移動を伴う勧誘・意志を表す。後者の場合は行先が示されず、「まず行き、それから後項動詞の行動を行う」という物理的移動を伴う勧誘・意志を表すのである。

ところで、“來去”に後続するものが処置構造の場合もあり、それも一種の連動文構文である。その例として、例えば次のものがある。

- (7) a. 想beh tshuā你緊來去！Thàn hit-片美麗田園iá-未thūn-平。來去將土地ê味寫做歌詩，留hōo以後咱ê囡兒。（想要帶你趕快出發！趁那片美麗田園還沒填平。去將土地的味道寫成歌與詩，留給以後咱們的孩子。）（君を連れて早く行こう！あの美しい田園がまだ更地にならないうちに。土地の味を歌と詩に書きに行こう。将来僕らの子供に残そう。）（環島北）
- b. ……來去hit-片土地將伊ê味寫做歌詩……（……去那片土地將它的味道寫

成歌與詩……) (……その味を歌と詩に書きに、あの土地へ行こう……)

(7a) は“環島旅行(北)”(台湾一周旅行(北部))という歌の歌詞である。ここで観察したいのは後半の“來去將土地 \hat{e} 味寫做歌詩”という歌詞である。ここでは“來去”の後に“將土地 \hat{e} 味寫做歌詩”という処置構造が続いている。“將”は文語体の処置構造のマーカ―であり、品詞は介詞である。“土地 \hat{e} 味”(土の味)は介詞目的語(“介詞賓語”)であり、“寫做”(～に書く)は動詞の後に結果補語が続く構造(“動補構造”)であり、“歌詩”(歌と詩)はその動補構造の指示行為(～に書く)によって、介詞目的語の指示対象(土の味)を処置した結果を表している。

この主語なしの“來去將土地 \hat{e} 味寫做歌詩”という発話を文脈から抜き出した場合、「(僕は)土地の味を歌と詩に書きに行く」という意志の解釈と、「(僕らは)土地の味を歌と詩に書きに行こう」という勧誘の解釈とが可能であり、そのどちらなのかは特定しにくい。ここではその文脈から、この発話が意志・勧誘のどちらかというよりも、意志も勧誘も表す中間事例であると言える。なぜなら冒頭の歌詞で、“想”(～したいと思っている)と“beh”(～しようとする)を使って願望・意志を表すと同時に、“tshuā你緊來去”(君を連れて早く行こう)という相手を勧誘する内容を述べているからである。

また、“來去”と処置構造の間に場所目的語を入れることも可能であり、例えば前掲(7b)がそうである。(7b)は(7a)を少し変えた作例であり、場所目的語“hit-片土地”(あの土地)を挿入することにより、「まずあの土地に行って、それからその味を歌と詩に書こう」、ということを表すこととなっている。

2.3. “來去”が連動文の後項動詞として用いられるシンタックス

この構文は、“來去”の後に場所目的語が続く場合と続かない場合とに分けられる。まず、前者の例文を見てみる。

(8) a. Oo~你我相招來去艋舨--ah! Tshuē-著先賢拍拼 \hat{e} 過去。(喔~你我相

約一起去艋舺啊！找到先賢奮鬥的過去。)(おお～お互いに誘い合って一緒にバンカに行こうよ！先人たちが頑張った過去を見つけよう。)(艋舺)

b.? Oo～你我相招去艋舺--ah！……

(8a) は“來去艋舺”(バンカへ行こう)という歌の歌詞である。この例文の“你我相招來去艋舺--ah”という連動文において、前項動詞は“相招”(誘い合う)であり、“來去”は後項動詞となる。「あなたと私は誘い合って一緒にバンカに行こうよ」という勧誘の意味を表している。

そこで、この歌詞における勧誘の意味は、“相招”(誘い合う)との共起に由来するものであり、“來去”とは関係がないのではないかと思うかもしれない。しかし、この例文の“來去”を、同様に「行く」という物理的移動を表す“去”に言い換えると、(8b)に示されるように不自然な文となる。このことから、勧誘を表す言語表現は“來去”と相性がいいのに対し、“去”とは必ずしも相性がいいとは限らない、ということが分かる。その理由は、何だろうか。

その理由として考えられるのは、やはり“來去”という方向動詞自体には勧誘の概念が含まれているのに対し、“去”という方向動詞には勧誘の概念が含まれていない、ということなのではないだろうか。この点について、以下の二組の例文を通してさらに考えてみたい。(9) はいずれも歌のタイトルであり、(10) では、(9) の“來去”を“去”に言い換えてある。

(9) a. 來去艋舺 (バンカへ行こう) (艋舺)

b. 來去夏威夷 (ハワイへ行こう) (夏威夷)

c. 來去台東 (台東へ行こう) (台東)

(10) a. 去艋舺 (バンカへ行け/行く……)

b. 去夏威夷 (ハワイへ行け/行く……)

c. 去台東 (台東へ行け/行く……)

(9) の歌のタイトルはいずれも“來去”の後に場所目的語が後接しているのみであり、主語や他の文脈や句読点などは一切ない。台湾語ネイティブならばタイトルを見るなり、それらの歌の内容が発話者からの勧誘を述

べるものか、あるいは発話者自身の意志を述べるものと理解してピンと来る。一方、(10)のようにタイトルを“去”にしたら、ネイティブでもその歌の内容はピンと来ないだろう。このような構文において“去”を使うと、いったい命令、意志、あるいは叙述なのかが特定しにくいからである。この二組の例文の比較から明らかのように、他の文脈の要因や統語的要因などがなく場所目的語しか後接していない場合でも、“來去”で述べると勧誘や意志の発話として解釈される。このことは、“來去”の概念は「行く」という物理的移動を行うことについての、発話者の勧誘・意志であることを示唆していると言えるだろう。

次に、連動文の後項動詞として用いられながら、その後に場所目的語がない“來去”の用例を見てみる。

- (11) a. 想 beh tshuā 你趕緊來去！最後 ê 環島假期。(想要帶你趕快去！最後的環島假期。)(君を連れて早く行こう！最後の台湾一周パケーション。)(環島北)
- b. 傑克：牛啊！牛啊！綴我來去--lah！希望你會當賣一个好價數……(傑克：牛啊！牛啊！跟我走啦！希望你能賣一個好價錢……)(ジャック：牛よ！牛よ！僕に付いていっしょに行こうね！君がいい値で売れるように……)(傑克p.93)

(11a)の“tshuā 你趕緊來去”という連動文において、前項動詞は“tshuā”(連れる)であり、後項動詞“來去”は副詞“趕緊”(早く)によって修飾されている。また、“來去”で述べる移動の目的は、この連動文では明示されていないが、すぐ後の発話“最後 ê 環島假期”(最後の台湾一周パケーション)によって明らかである。そこから分かるように、この例の連動文は「君を連れて早く(最後の台湾一周パケーションへ)行こう」という意味を表している。この例文は前掲(7a)と同じ歌の歌詞であり、やはり意志・願望と勧誘の中間事例の発話である。

前掲(11b)は童話「ジャックと豆の木」台湾語版の中の発話である。「牛を売ってきて」とお母さんに言われたジャックが、牛を売りに行こうとする時に、牛に言った発話である。“綴我來去--lah”という連動文において、

省略された主語はその直前の発話に出てきた聞き手の“牛”である。“綴”(付く)は前項動詞であり、“-lah”は聞き手に対する命令・祈願の語気助詞として使われている。⁸ また、“來去”で述べる移動に目的地があるかどうかについては、この発話では明示されていない。ただし、物語の文脈によってそれには目的地があり、市場であることとして理解される。この例の連動文は、「(君は)僕に付いて一緒に(市場へ)行こう」という聞き手(牛)に対する命令とも勧誘とも取れる発話であり、命令と勧誘の中間事例だと言えるかもしれない。

しかし、本稿ではこのような中間事例もすべて〈勧誘〉の発話の一種だと見なしておく。なぜなら、“來去”で述べると、勧誘の典型事例にせよ、勧誘と命令の中間事例にせよ、あるいは勧誘と意志の中間事例にせよ、何らかの意味で勧誘に関わっている以上は、発話者が聞き手などに対して一緒に移動を起こさせようとする、という共通点を持つからである。この特徴は、“來去”で述べる意志の典型事例は持っていない。後者の場合は、発話者が誰かに一緒に移動してほしいという意味は一切なく、発話者(もしくは発話者とその仲間)だけが移動を起こそうとすることを述べるのである(第3節で後述)。

以上の(11a-b)で見たように、“來去”が連動文の後項動詞として用いられる場合、その後に場所目的語がないならば、「何かをしてから～へ向かって行こう」という意味を表すことができることが分かる。

では、次の例文はどうだろうか。

⁸ 中国語の“跟”(～に付いて)は介詞として規定されているため、中国語の“跟我走”(僕に付いて一緒に行こう)は連動文ではなく、介詞フレーズ“跟我”が状語(連用修飾語)として述語動詞“走”を修飾する構文だとされている。しかし台湾語の“綴”(付く)は、教育部(2011)では動詞として規定している(閲覧日:2016/03/14)。そのため、本稿では“綴我來去”を“綴”と“來去”という二つの動詞が使われている連動文構文だと見なす。なお、教育部(2011)の品詞分類の中には、中国語と同様に、台湾語にも介詞という品詞があるとしている(閲覧日:2016/03/14)。

(12) 咱共房間擷擷--leh tō好通來去--ah。(咱們把房間整理打掃一下就該走了。)

(私たちは部屋をちょっと片付けて掃除してからそろそろ行こう。)

この例文の“來去”も同じ統語構造に置かれており、“共(kā)”は口語体の処置構造のマーカ―(介詞)であり、“共房間擷擷--leh”(部屋をちょっと片付けて掃除する)は処置構造である。この例文(12)を見ただけでは、「何かをしてから～へ向かって行こう」という解釈よりも、通常「何かをしてから、元の場所から立ち去ろう/離れよう」として解釈される。しかし例えば、「おいしい食事が待っている」などの文脈があれば、この例文の解釈は「何かをしてから～へ向かって行こう」に変わる。このことから、場所目的語も動詞も後続していない統語構造においては、“來去”は「～へ向かって行こう」と「出発点から離れよう」という二つの解釈が可能である、ということが明らかである。

そもそも、どこかへ/何かをしに向かって移動しようとするれば、必ず元の場所から出発しなければならない。「出発点から離れよう」と「～へ向かって行こう」という二つの意味は連続的である。“來去”の直後に場所目的語が続く統語構造であれば、その物理的移動の空間的目標が明示されることとなる。また、“來去”の直後に動詞が続く統語構造であれば、その移動の行動的目標がそれで明示されることとなる。何らかの目標が明示されている場合、その“來去”は「元の場所から立ち去ろう」という部分よりも、「～へ向かって行こう」という部分をプロファイルしていると認知し理解されやすい。しかし、“來去”の後に場所目的語も動詞も一切ない統語構造においては、その移動における目標は明示されていない。その場合、その“來去”が「～へ向かって行こう」という部分をプロファイルしているか、あるいは「出発点から離れよう」という部分をプロファイルしているかは、文脈的要因により語用論的な解釈に委ねられるだろう。

2.4. “來去”が単独に使用されるシンタックス

“來去”が単独に使われているシンタックスとは、“來去”という一語の

みで文を成しているというシンタックス、すなわち一語文も含むが、それだけを指しているわけではない。“來去”の後に場所目的語もなく、その前後に動詞もない（すなわち連動文の中に置かれていない）シンタックスのことを、便宜上そのように呼んでおく。このような統語構造においては、“來去”の後に場所目的語も動詞も後続していないため、やはり「出発点から離れよう」と「(どこかへ/何かをしに) 向かって行こう」といういずれの解釈も可能である。例えば、次の例文を見てみる。

(13) a. 我 tō 隨 beh 來去 --ah, 你毋免無閒 --lah! (我馬上就要走了, 你別忙啊!)

(私はすぐに行くから。お構いなく。)

b. 頭前 ê 小姐 beh 去佗位? 你慢慢行, 我 liâm-mi 來去。小等 -- 一下, 小等 -- 一下, 全世界只愛你一个。(前的小姐要去哪裡? 你慢慢走, 我馬上過去。稍等一下, 稍等一下, 全世界只愛你一個。)(前のお嬢さんはどこへ行くんだい? 急ぐな、僕はすぐにそっちへ行くんだから。ちょっと待って、ちょっと待って、世界中で君一人だけを愛してるんだから。)(煞到妳)

(13a)において“來去”の発話の後に、“你毋免無閒 --lah”(お構いなく)という発話が続いているため、“來去”は通常「そこから立ち去ろう」という意味として理解される。それに対し(13b)においては、“來去”の発話の前に“頭前 ê 小姐 beh 去佗位? 你慢慢行”(前のお嬢さんはどこへ行くんだい? 急ぐな)という発話が先行している。それにより、この“來去”は発話者がお嬢さんのいる場所へ「向かって行く」という意味として理解される。

この(13b)で注目してほしいのは、この“來去”の発話が発話者(=主語)の意志を述べながらも“beh”と共起していない、という点である。例えば前掲(6b)“我 beh 來去臺北拍拼”などの用例にも見られるように、“來去”の意志の発話は“beh”と共起することが多い。台湾語の助動詞“beh”は中国語の助動詞(能願動詞)“要”と一部の意味が同じであり、主語の願望・意欲・決意や推量などの意味を表すため、主語の意志を述べる発話において使われることが多い。それで、“來去”が“beh”と共起している発

話において意志の意味が現れるのは、ただ“beh”によるものであり、“來去”とは関係がないのではないかと思うかもしれない。しかし“來去”は意志動詞であるため、この(13b)にも見られるように、“beh”と共起していなくても主語の意志を述べることがある。しかもそのような例は、実際の言語使用において決して少なくない。

では、逆に“beh”があるかどうかで、どのような相違点があるだろうか。この点について、次の二つの例文で説明しよう。

(14) a. 我 beh 來去菜市仔。(我要去菜市场。)(私は市場へ行こうと思っている。)

b. 我來去菜市仔。(我去菜市场。)(私は市場へ行く。)

例文の日本語訳からも分かるように、“beh”と共起すると、その移動を行おうという主語の願望・決意がプロファイルされる。一方、“beh”を使わなかったら、その移動を今にも実行に移すという主語の近未来の行動がプロファイルされる。用例(13b)において“beh”と共起していないのは、今からもう動き出すことに焦点を置いて述べているからである。それに対し、前掲の用例(6b)の“我 beh 來去臺北拍拚”のように“beh”を用いているのは、主語(すなわち発話者)の決心・決意に焦点を置いて述べているからであろう。

では、“來去”の意志の発話において“beh”を使うことが多いのは、なぜだろうか。それには二つの理由が考えられる。まず意志・意欲・願望・決心・決意などの概念はもともと近似し重なり合っているため、互いに相性がいいからである。次に、“來去”の発話の主語が聞き手を含む一人称複数“咱”なら、場合によっては意志と勧誘という二つの解釈が可能ながある。その際、“beh”と共起することにより、その解釈は主語の願望・決意を述べる発話として限定されることとなるのである(3.3.4節後述)。

ところで、勧誘・意志の意味が“來去”という方向動詞の概念に内在することを示唆する例については、すでに2.3節において場所目的語のみが後接する“來去”の例(9)と“去”の例(10)の比較を通して見た。実は、“來去”と“去”の一語文からもこの点を確認することができる。この点に

ついて、次の例文を比べてみる。

- (15) a. 來去！來去！來去！來去！ 咱來去夏威夷！（走吧！走吧！走吧！走吧！咱們一起去夏威夷！）（行こう！行こう！行こう！行こう！僕らは一緒にハワイへ行こう！）（夏威夷）（前掲（4a））
- b.? 去！去！去！去！ 咱去夏威夷！（?去！去！去！去！咱們一起去夏威夷！）（?行け！行け！行け！行け！僕らは一緒にハワイへ行こう！）
- c. 去！去！去！去！ 恁緊去夏威夷！（去！去！去！去！你們快去夏威夷！）（行け！行け！行け！行け！お前たちは早くハワイへ行け！）

(15a) は2.1節の用例（4a）であり、“來去夏威夷”（ハワイへ行こう）という歌の歌詞である。この発話の“來去”をすべて（15b）のように“去”に言い換えると不自然になる。それはなぜだろうか。

まず、(15)の後半について考えてみよう。〈“咱(lán)”（聞き手を含む一人称複数人称代名詞）+方向動詞+場所目的語〉という構文は、基本的に「（聞き手を誘って）私たちは～へ向かって移動しよう」という勧誘の意味を表す構文である。また、主語“咱”の指示対象全員が発話者の役割を担っている場合は、上記の勧誘の意味以外に、「私たちは～へ向かって移動する / 移動したい」という意志の意味を表すことも可能である（3.3.4節参照）。しかしいずれにしても、「聞き手のみが～へ向かって移動しろ」という純粋な命令の意味を表さない。つまり、(15a) (15b)の後半はどちらも通常は「私たちは一緒にハワイへ行こう」という勧誘の意味として理解されるが、場合によっては「私たちは一緒にハワイへ行く」という意志の意味として解釈されることがある、ということである。実際、2.1節でも見たように、(15a)の“咱”の指示対象は二人の〈発話者=聞き手〉であり、二人が互いに自らの意志を述べつつも相手を勧誘しており、これは勧誘・意志の中間事例の発話である。

では、(15)の前半の一語文はどうだろうか。中国語と同様に、台湾語においても、意志動詞の一語文は語用論的にしばしば命令文として解釈される。例えば、台湾語の“走(tsáu)”は「走る / 離れる」などの意味を表す意

志動詞であるが、それを一語文の発話として使う場合、「走れ！ / 行け！」などの命令の発話になる。そして、(15b) の前半の“去”の一語文も普通「行け！」という意味の命令文として理解される。ということは、(15b) は前半で「行け！」と聞き手に命令していながら、後半で「(聞き手を誘って) いっしょに行こう」と勧誘したり、「(聞き手も含めた私たちは) いっしょに行く」という意志を述べたりしている。そのため、前後の整合性がなくなってしまい不自然になるのである。なお、(15) において動詞をすべて“去”に言い換えても整合性が取れる自然な発話にするためには、例えば(15c)「お前たちは早くハワイへ行け」のように主語を二人称に変えなければならない。

では、(15a) はどうだろうか。前述のように、この例文は歌詞であり、前半と後半が整合性の取れた自然な発話である。それは、他の意志動詞の一語文とは異なり、“來去”の一語文が「行け！」というような純粋な命令の意味を表さず、「行こう」「行こうとする」「行く」など、必ず勧誘・意志の意味を表すからである。

要するに、場所目的語も主語もなく、他の文脈も一切ない一語文の場合において、“去”など他の動詞を使っても通常勧誘・意志の発話にはならないのに対し、“來去”を使うと必然的に勧誘・意志の発話になる、ということである。このことから、“來去”の勧誘・意志の意味は文脈的要因や統語的要因によるものではなく、“來去”という言語表現自体に内在する意味であることがいっそう明らかとなる。“來去”は〈“去”が表す物理的移動+勧誘・意志〉という概念、換言すれば〈「出発点から離れよう / ~へ向かって行こう」という発話者からの勧誘や発話者の意志〉という概念を表すゲシュタルト（まとまった一つの慣習的な言語単位）として認知し理解されると言えるのである。

2.5. “來去”が方向補語として用いられるシンタックス

中国語の方向動詞と同様に、台湾語の方向動詞も方向補語として使われ

る。そして、台湾語の“來去”も方向動詞の一つであり、やはり方向補語として用いられることがある。例えば、次の例文がそうである。

(16) a. 雉雞：Ko-ko-ko，恁，恁逐家tàm tsia等，我飛來去看-māi--leh。(雉雞：咕咕咕，你們，你們大家在這裡等，我飛過去看一看。)(キジ：クククー、あなたたち、あなたたちみんなここで待ってて、僕は飛んで行って見てみるよ。)(桃太郎p.61)

b. 伊講伊tsit-擺離開，若無成功是拍死無beh koh轉--來去。(他說他這次離開，如果沒有成功就算打死也不再回去。)(彼は言った。今回故郷を出て、もし成功しなかったら死んでも二度と帰って行かないって。)(一百万)⁹

(16a)の“我飛來去看-māi--leh”という発話において、“來去”は動詞の“飛”に後続し、飛ぶ方向が元の場所から遠ざかって行くことを表している。そして、“飛來去”という動詞句の後に、もう一つの動詞句“看-māi--leh”(見てみる)が続いており、全体で一つの連動文構文となっており、飛んで行ってから見てみる、ということを表している。また(16b)において、動詞“轉”は「(家・故郷などへ) 帰る・戻る」という意味を表しており、その後に“來去”が続き、いま家や故郷を離れている者が帰って行くことを表している。

この二つの例文はどちらも意志の発話であるが、勧誘の発話でも方向補語の“來去”が用いられる。例えば、発話時においてともに外にいる家族などに対して、「一緒に帰ろう」と言う時、次の発話がしばしば使われる。

(17) 咱轉--來去！(咱們一起回去吧！)(私たちは一緒に帰ろう！)

このように、台湾語の“來去”が方向補語として用いられる場合、その

⁹ “來去”が方向補語として用いられる際、(16b)の“--來去”のように、その音節の声調が軽声であることを示すダブル・ハイフン“-”が直前に付く場合がある。それは、台湾語の方向補語が音節数にかかわらず、その後続音節がなかったり軽声だったりする場合は、方向補語のいずれの音節も軽声となることを示すためである(教育部2011、閲覧日:2016/03/10)。一方、(16a)のようにハイフンが付いていない場合もあるが、それは方向補語の後に軽声以外の音節が続き、方向補語のいずれの音節も軽声とならずに通常の変調を行うからである。

前の動詞によって示される動作の方向が「元の場所から遠ざかる」という方向であることを表す。この点で、方向補語としての台湾語の“去”と共通している。しかし両者は相違点も多い。その相違点の比較を通して、“來去”に内在する概念内容がいつそう明らかになるのではないかと思われる。次の第3節では、方向補語および動詞の“來去”と“去”を比較したい。

3. 方向補語および動詞の“來去”と“去”

“來去”と“去”との比較に際して、まず以下の三組の例文を見てみる。

(18) a. 我 tsáŋ 有轉--去。(我昨天確實回去了。)(私は昨日確かに帰って行ったんだよ。)

b.? 我 tsáŋ 有轉--來去。

(19) a. 恁看--ê, hia-ê 雞娃仔攏會飛去天頂--ooh。(你們看著, 那些氣球都會飛到天上去喔。)(君たち見ておいて、あれらの風船は全部空へ飛んで行くよ。)

b.? 恁看--ê, hia-ê 雞娃仔攏會飛來去天頂--ooh。

(20) a. 貓咪 beh 走去外口--lah。(貓咪想要跑到外面去啦。)(ネコは外に出て行くうとしてのの。)

b.? 貓咪 beh 走來去外口--lah。

これらの例文では、“去”も“來去”も方向補語として用いられているが、いずれも“去”が自然であるのに対し、“來去”では不自然となる。その理由は、“來去”が方向補語として使われる際にも、動詞の“來去”と同じ制限を受けているからなのではないかと考えられる。以下に、動詞の“去”と比べつつ、動詞の“來去”が受けるこの制限について論じる。

3.1. アスペクトについて

劉綺紋(2016)で述べたように、動詞の“來去”は、テンス的制限は受けないが、近未来アスペクトというアスペクト的制限を受ける。例えば次の例文は、「どこかへ向かって行く」ことを示す“去”や、「元の場所から離れる」ことを示す“走”などの動詞で述べることができるが、“來去”で

は述べることができない。

(21) a.? 伊頭拄仔 tō 來去 --ah。

b. 伊頭拄仔 tō 去 --ah。(他剛才就去了。)(彼はさっきもう行った。)

c. 伊頭拄仔 tō 走 --ah。(他剛才就走了。)(彼はさっきもう行ってしまった。)

それは、(21) ではそれらの移動がすでに実行されているからである。その移動が近未来に実行される場合にのみ、動詞“來去”によって述べるのできるのである。

そして、前掲(18)では「帰って行った」というすでに実行された移動を述べている。この文において方向補語の“來去”が使えないのは、方向補語の“來去”も近未来アスペクトというアスペクト的制限を受けるからだろう。

3.2. 発話のタイプについて

では、前掲(19)で「あれらの風船が全部空へ飛んで行く」という近未来の移動を述べているが、この文で方向補語の“去”が使えるのに対し、方向補語の“來去”が使えない理由は何だろうか。それも、動詞の“去”と“來去”の相違に由来すると思われる。

まず、2.1節～2.4節で見たように、動詞の“來去”で述べると、意志の典型事例の発話や、勧誘の典型事例の発話や、勧誘と意志の中間事例の発話や、勧誘と命令の中間事例の発話などになる。そのいずれも、勧誘あるいは意志に関わる発話である。実際、勧誘もしくは意志に関わらない発話は、動詞の“來去”で述べることができない。それに対し、動詞の“去”にはそのような制限がない。例えば次の例文は勧誘や意志に関わっておらず、近未来における台風の進路について述べている。この際、動詞の“去”は使えるのに対し、動詞の“來去”は使えない。

(22) a. 聽講風颶會 去 日本 --neh! (聽說颶風會去日本呢!) (台風は日本へ行くそうだよ!)

b.? 聽講風颶會 來去 日本 --neh!

そして前掲の(19)では近未来の移動を述べつつも、その移動は「風船が空へ飛んで行く」という、勧誘や意志に関わらない移動である。この際、方向補語の“來去”で述べることができないのは、方向補語の“來去”も勧誘や意志の発話でないと使うことができないからだと考えられる。

3.3. 主語の人称について

3.3.1. 動詞の“來去”・“去”と主語の人称との関係

では、前掲の(20)において、それが意志の発話であるにもかかわらず、やはり“來去”で述べることができないのはなぜだろうか。その理由について、次の三組の例文を見てみたい。これらの例文において、“去”も“來去”も(方向補語ではなく)動詞として使われている。

- (23) a. 我去食桌。(我去喝喜酒。)(私は披露宴に行く。)
b. 我來去食桌。(我去喝喜酒。)(私は披露宴に行く。)
- (24) a. 你去食桌--lah!(你去喝喜酒啦!)(あなたは披露宴に行きなさいよ!)
b. 你來去食桌--lah!(你和我一起去喝喜酒啦!)(あなたは私と一緒に披露宴に行こうよ!)
- (25) a. 伊kám beh去食桌?(他要去喝喜酒嗎?)(彼は披露宴に行きますか?)
b. 伊kám beh來去食桌?(他要和我一起去喝喜酒嗎?)(彼は私と一緒に披露宴に行きますか?)

これらの例文で注目してほしいのは、主語の人称によっては“去”と“來去”とで意味が異なる、という点である。まず、(23)の一人称単数主語の例文において、“去”と“來去”とでその意味に目立った相違はない。どちらも主語、すなわち発話者が披露宴に行こうとしていることを述べている。

では、(24)の二人称主語の例文と(25)の三人称主語の例文ではどうだろうか。前述のように、盧廣誠(2011)では「“來去”の主語は必ず一人称であるかあるいは一人称を含む」としている(p.253)。確かに、“來去”の発話の主語は一人称あるいは一人称を含む場合が多く、それらは“來去”

の発話のプロトタイプと言えるだろう。しかし、主語に一人称を含まない場合もある。(24) (25) もそうであるが、2.3節で挙げている童話「ジャックと豆の木」の用例(11b)においても、省略された主語は二人称の指示対象である聞き手(牛)である。その二人称主語は必ずしも省略する必要がなく、明示することもできる。それどころか、実は二人称・三人称主語の発話にこそ、“來去”の概念内容を理解する重要な手掛かりが隠されているのである。

二人称・三人称主語で述べるということは、Langackerの用語を用いれば、発話者すなわちオフ・ステージにいる概念化の主体(subject of conceptualization)と、主語すなわちオン・ステージにいる概念化の対象(object of conceptualization)とが同一でない、ということである(Langacker 1999)。例文(24) (25)は一見、“去”の発話も“來去”の発話もどちらも単に概念化の対象である二人称・三人称の指示対象に対して、「行く」という物理的移動を行う意志について要求・確認・質問などをする発話であるかのように見える。¹⁰ 確かに、“去”の発話はそうである。“去”の概念において必ず空間移動を行うのは概念化の対象である。一方、概念化の主体が移動者になるかどうかは語用論的解釈によるものである。

しかし、“來去”の発話はそれと異なる。それぞれの日本語訳からも分かるように、「私(発話者)といっしょに」という訳が付け加わっている。それは、“來去”で述べると、まず発話者が「行く」という移動を行おうとする、という前提が必ず存在するからである。すなわち、「発話者自身は披露宴に行こうとする」し、その上で「主語も行こう/行くよね/行くだろう/行くか……」などを述べている。結果的に、発話者が主語に対して「私といっしょに」という働きかけの意味が現れるのである。このことから、“來

¹⁰ 本稿で言う「主語」は意味上の主語(動作主)のことを指している。例えば“白川郷我bat去。”(白川郷は私は行ったことがある。)という文において、文法上の主語は“白川郷”という場所名詞であるが、本稿で問題にしているのは意味上の主語の“我”のことである。

去”の概念においては概念化の主体も概念化の対象もともに移動者になる、ということが分かる。つまり、オフ・ステージにいる概念化の主体が空間移動を行おうとするという前提に立った上で、オン・ステージにいる概念化の対象も、概念化の主体に付いてともに空間移動を行おうと働きかける概念なのである。

3.3.2. 方向補語の“來去”・“去”と主語の人称との関係

前節で見たように、動詞の“來去”で述べると発話者が必ず移動者に含まれることになる。それは、発話者が概念化の主体というオフ・ステージの役割しか担っていない場合でも、あるいは言語表現に登場して、概念化の対象というオン・ステージの役割をも同時に担っている場合でも、いずれも同様である。要するに、“來去”の発話において、発話者は移動者自身であるか、もしくは移動者の一人なのである。それに対し、動詞の“去”の発話において、発話者が必ず移動者になるのは、発話者自身が概念化の対象という役割をも同時に担っている場合のみである。発話者が概念化の対象となっていない場合は、移動者になるかどうかは文脈的要因によって理解されることとなる。

そして、動詞における両者のこの相違点は、方向補語の“去”と“來去”も受け継いでいる。例えば、以下の例文において、“去”も“來去”も動詞“轉”(帰る)の方向補語として用いられており、「帰る」という動作の方向が発話地点から遠ざかって行く、ということを表している。

- (26) a. 我 beh 轉--去--ah。(我要回去了。)(私は帰る。)
b. 我 beh 轉--來去--ah。(我要回去了。)(私は帰る。)
- (27) a. 你轉--去--honnh!(你回去, 好吧!)(あなたは帰ってね!)
b. 你轉--來去--honnh!(你跟我回去, 好吧!)(あなたは私と一緒に帰って行くね!)
- (28) a. 伊 mā 通好轉--去--ah。(他也該回家了。)(彼もそろそろ帰らないと。)
b. 伊 mā 通好轉--來去--ah。(他也該跟我回家了。)(彼もそろそろ私と一緒に

帰って行かないと。)

(26)の主語は一人称単数のため、やはり“去”と“來去”とでその意味に特に目立った違いは見られない。一方(27)(28)の主語は二人称・三人称のため、“去”と“來去”とでその意味は明らかに異なる。どちらの“來去”の発話でも「主語が発話者に付いていっしょに帰って行く」という意味を伴っている。主語が帰る場所は、発話者の家だったりその近くだったり、言い換えれば、主語が発話者と同居していたり近い場所に住んでいたりするなどのことを含意している。それに対し、“去”の発話にはそのような含意はなく、主語が帰る場所は主語の家であることしか表していないのである。

このことは、第3節の冒頭で掲げた例文(20)の問題についても説明することができるだろう。(20)においては、発話者は主語(ネコ)ではなく、かつ、移動しようとするのは主語(ネコ)だけである。“去”で述べると自然な発話となるのは、“去”は主語が移動者になることしか表さないからである。それに対し、“來去”の発話は主語が発話者とともに移動者にならないかため、“來去”で述べると不自然になってしまうのである。

では、次の例文はどうだろうか。例文(29)は三人称単数の主語で、移動者はその“伊”(彼)だけである。この際、方向補語の“來去”を使うと、前掲の(20)のように不自然になるはずなのに、この(29)は自然な文である。それはなぜだろうか。

(29) 伊講伊 tsit-擺離開, 若無成功是拍死無 beh koh 轉--來去。(他説他這次離開, 如果沒有成功就算打死也不再回去。)(彼は言った。今回故郷を出て、もし成功しなかったら死んでも二度と帰って行かないって。)(一百萬)(前掲(16b))

それは、この例文が間接話法の発話であり、かつ、引用された発話者(一つ目の“伊”)と引用された主語(二つ目の“伊”)が同一人物だからである。この場合は、その引用された発話の中で、〈発話者=主語〉が移動する意志を“來去”によって述べているからである。

3.3.3. 一人称単数主語と勧誘・意志との関係

前述のように、“來去”で述べると、発話者（概念化の主体）の移動が前提となり、その上で主語（概念化の対象）の指示対象の移動について言及することになる。そこで、二人称主語・三人称主語のような、主語と発話者が一致しない場合、必然的に発話者から主語に対して「私といっしょに」と勧誘を働きかける発話となる。では、一人称主語の場合はどうだろうか。一人称複数主語については3.3.4節で後述するが、ここではまず一人称単数主語について考えてみる。

一人称単数主語の場合、主語が発話者と完全に一致しており、移動者になりうるのは一人しかありえないため、発話者が自らの意志を述べたり宣言したりする発話となる。前掲(23)や(26)において、“來去”と“去”とでその意味に明らかな相違が感じられないのは、そのためである。本来、“來去”と“去”とでは内在する概念は異なっている。しかし一人称単数主語を用い、概念化の主体を唯一の概念化の対象としてオン・ステージに登場させることにより、結果的に“來去”と“去”における概念上の相違が消去されることとなるのである。

また、このことは次のように言い換えることもできる。主語だけの移動についての意志を述べる場合、例えば主語が一人称単数のように主語と発話者が一致するならば、“來去”でも“去”でも使うことができるのに対し、主語が二人称・三人称のように、主語と発話者が一致しない場合は、“來去”を使うことができず、“去”しか使うことができない。

この点については、次の用例における“來去”と“去”の使い分けで確認できるだろう。(30a-c)は、日本の童話「桃太郎」の台湾語版のなかに出てきた一続きの会話文であり、桃太郎が今から鬼を征伐しに行くという自らの意志を、初めて犬に告げた部分の会話である。

- (30) a. 桃太郎: 我--ooh, 這馬是 beh 來去拍彼 ê 萬惡 ê 鬼王--ah。啊你 kám 知影路? 會當共我報路--無? (桃太郎: 我啊, 現在是要去打那個萬惡的鬼王啊。那你知道路嗎? 能不能告訴我怎麼走?) (桃太郎: 僕はね、今はあの極悪

な鬼を征伐しに行くんだけど。じゃ君は道を知っているかい？行き方を教えてくれるかい？）(桃太郎p.56)

b. 狗仔罔: Siánn? 你 beh 一 ê 人去拍鬼王? (小狗: 什麼? 你要一個人去打鬼王?) (子犬: 何ですって? あなたは一人で鬼を征伐しに行くんですか?) (桃太郎p.56)

c. 桃太郎: 著! 無毋著, 我 --ooh, tō 是一 ê 人 beh 來去挑戰 --伊! (桃太郎: 對! 沒錯, 我啊, 就是一個人要去挑戰他!) (桃太郎: そう! その通り。僕は一人で鬼に挑戦しに行くんだ!) (桃太郎p.56)

この三つの例文は、いずれも「桃太郎一人が鬼を征伐しに行く」という桃太郎の意志を述べる発話である。しかし(30a)(30c)では“來去”が使われているのに対し、(30b)では“去”が使われている。前者の場合は“來去”の代わりに“去”を使っても問題がないが、後者の場合は“去”の代わりに“來去”を使えない。それは、(30a)(30c)の発話においては、発話者も主語も桃太郎自身であり、つまり、一人称単数主語を用いているが、それに対し、(30b)の発話では発話者が子犬で、主語の指示対象は聞き手の桃太郎であり、つまり、二人称主語を用いているからなのである。

なお、(30a-c)の“來去”や“去”の発話ではいずれも助動詞“beh”を使っている。そのことから、主語が発話者と一致するかどうかにかかわらず、いずれも“beh”で述べることができる、ということが分かる。それは、“beh”で表す意志・願望は、主語(概念化の対象)の意志・願望に限定されるからである。

3.3.4. 一人称複数主語と勧誘・意志との関係

では、一人称複数主語のような、主語と発話者が部分的に一致する場合は、勧誘/意志のどちらの発話として理解されるのだろうか。

台湾語には、“阮(guán/gún)”と“咱(lán)”という二つの一人称複数人称代名詞がある。“阮”は聞き手を含まない除外型(exclusive)であり、〈発話者(speaker) + 発話における(一人以上の)その他の参与者

(participant)を表す。それに対し、“咱”は聞き手を含む包括型 (inclusive) であり、〈発話者 (speaker) + 聞き手 (addressee)〉を表す場合と、〈発話者 (speaker) + 聞き手 (addressee) + 発話における (一人以上の) その他の参与者 (participant)〉を表す場合とがある。“阮”と“咱”を主語とした“來去”の例文は、例えば (31a) (31b) がそうである。

(31) a. 阮來去俎俎！ (我們去玩！) (私たちは遊びに行く！)

b. 咱來去俎俎！ (咱們去玩！) (私たちはいっしょに遊びに行こう！)

“來去”という言語表現には、〈主語 (概念化の対象) + 発話者 (概念化の主体)〉が必ず移動者になるという概念が内在している。しかし、〈聞き手〉が移動者になる / ならないということは、“來去”の概念には含まれていない。聞き手は仮に〈主語 + 発話者〉の一員であれば自ずから移動者になり、逆に〈主語 + 発話者〉の一員でなければ結果的に移動者にならない。結局、聞き手が移動者になるかどうかは、〈主語 + 発話者〉の成員に含まれるかどうかによるのである。

そして、前掲 (31a) のように“阮”を主語として使うと、聞き手は主語の指示対象には含まれず、つまり〈主語 + 発話者〉の一員にならない。そこで、“來去”で述べても聞き手の移動については言及しておらず、言い換えれば聞き手は移動者にはならない。発話者が代表者になって、主語 = 〈発話者 + 発話における (一人以上の) その他の参与者〉の移動についての意志を、聞き手に伝達・宣言する発話として理解される。

では、発話者から、〈発話におけるその他の参与者〉への勧誘の発話として解釈されることは可能だろうか。それは不可能だろう。なぜなら、一人称複数人称代名詞を主語として使う以上、〈発話におけるその他の参与者〉が発話者と同じ行動を取ることが前提となるからである。またそのことから、〈発話におけるその他の参与者〉を〈発話者の仲間〉と言い換えても差し支えないだろう。

次に、(31b) のように“咱”を主語として使う場合について考えよう。この場合、聞き手は主語の指示対象に含まれ、必然的に〈主語 + 発話者〉

の一員になる。この際、“來去”で述べると、聞き手も移動者になる。さらにその前提として、発話者が移動することになっている。そのため、通常発話者から聞き手へ「私といっしょに」移動するように勧誘を働きかける発話として理解されるのである。

では、次の例文(32)で、“咱”を主語として使いながら、発話者の意志しか述べていないのは、なぜだろうか。

(32) 海水鹹鹹，日頭炎炎，今仔日咱beh來去剃頭店。(海水很鹹，太陽很大，今天咱們要去理髮店。)(海水は塩からくて、太陽はキラキラ。僕らは今日散髪屋に行くんだ。)(夏威夷)(前掲(4b))

2.1節で述べたように、この例文(32)はデュオグループの歌の歌詞であり、二人の歌手がデュエットしている。そこでこの歌詞の中では、主語“咱”の指示対象は次のいくつかの可能性が考えられるが、いずれも〈発話者+聞き手〉を表している。¹¹

- (33) a. 歌い手₁: 発話者
歌い手₂: 発話者
歌の聴き手(listener): 聞き手 (addressee)

¹¹ “咱”は〈発話者+聞き手+発話における(一人以上の)その他の参与者〉を表すことも可能なため、歌詞の“咱”の指示対象は次の(ia-b)の可能性もあるのではないかと思われるかもしれない。

- (i) a. 歌い手₁: 発話者
歌い手₂: 聞き手
歌の聴き手: その他の参与者
b. 歌い手₁: 発話者かつ聞き手
歌い手₂: 発話者かつ聞き手
歌の聴き手: その他の参与者

しかし実際は上記の可能性は小さい。なぜかと言うと、一人称複数人称代名詞を主語として使う以上、〈発話におけるその他の参与者〉が発話者と同じ行動を取ることが前提となるからである。しかし(32)は歌であるため、その他の参与者は不特定の歌の聴き手になってしまい、発話者と同じ行動を取るという前提が成立しにくいからである。

- b. 歌い手₁: 発話者
歌い手₂: 聞き手
- c. 歌い手₁: 発話者かつ聞き手
歌い手₂: 発話者かつ聞き手
歌の聴き手: 聞き手
- d. 歌い手₁: 発話者かつ聞き手
歌い手₂: 発話者かつ聞き手

上記の可能性のうち、(33a-c) はいずれも、主語の指示対象には発話者以外の聞き手(すなわち、(33a) (33c) は歌の聴き手、(33b) は歌い手₂)が含まれているため、通常発話者から聞き手への勧誘の発話として解釈される。それに対し、(33d) の主語の指示対象である二人の歌い手は発話者かつ聞き手という二つの役割を担っており、かつ、発話者以外の聞き手は含まれていない。そのため、勧誘と意志という二つの解釈が可能になる。すなわち、前掲(32)の歌詞が含まれる歌で、二人の歌い手は発話者と聞き手という二つの役割を交代に演じ、交互に発話者から聞き手へと勧誘している、言い換えれば誘い合っているという解釈も可能である。その一方、一人の発話者(=歌い手₁)が聞き手(=歌い手₂)の意志をも代弁して述べているという解釈も可能である。結局、この発話の解釈の最終的な決め手は主語の願望・決意を表す助動詞“beh”との共起に委ねられている。それにより、それは勧誘の発話ではなく、主語(つまり発話者)の意志を述べる発話だと特定されるのである。実際に歌を聞くと、例文(32)の部分を歌っているのは歌い手₁だけであり、その人が代表者としてグループメンバー二人の意志を述べているのだと言える。

このように、“來去”の発話の主語が一人称複数の場合、それが聞き手を含まない“阮”なら発話者が意志を述べる発話として理解され、一方、聞き手を含む“咱”なら通常発話者から聞き手へと勧誘する発話として理解される。ただし、主語“咱”における複数の指示対象全員が発話者となっていたり、またそのように見なされる場合は、発話者の意志を述べる発話

として解釈される可能性が出て来るのである。第1節の注3で述べたように、“來去”の発話で勧誘と意志の中間事例が多く存在するのは、“來去”の概念における勧誘と意志の意味が連続的だからである。“咱”を主語として取り立てた“來去”の発話からもこの連続性を伺うことができるだろう。

4. おわりに

本稿は、台湾語の“來去(lâi-khi)”の概念と意味について、教育部(2011)のA「ここから離れる」とB「行く・どこかへ向かって行く。一人称あるいは一人称を含んだ場合の動作の意志・願望を表すのに用いる」という説明を再検討しつつ考察を行った。その考察を通して、以下の三点を明らかにした。

一点目は、“來去”の意味についての解釈は、統語的要因や文脈的要因などにより異なることがある、という点である。場所目的語のみが後接する統語構造において、“來去”は「どこかへ向かって行こう」という意味として解釈され、連動文の前項動詞として用いられる統語構造では「何かをしに向かって行こう」という意味として解釈される。また、連動文の後項動詞として使われる場合も含めて、“來去”の直後に場所目的語も動詞も一切後接していない統語構造においては、「どこかへ/何かをしに向かって行こう」と「ここ(出発点)から離れよう」という二つの解釈が可能となり、その際は、文脈的要因によってその解釈が分かれる。

二点目は、「ここ(出発点)から離れる」という移動を表す場合のみならず、「どこかへ/何かをしに向かって行く」という移動を表す場合でも、“來去”は勧誘や意志の発話にしか現れない、ということである。それは、統語的・文脈的要因によるものではなく、勧誘・意志の意味が“來去”という言語表現自体に内在するからである。

三点目は、“來去”の概念は、オフ・ステージの発話者(概念化の主体)が移動しようとするのがまず前提として存在し、その前提に立った上

で、言語表現に登場するオン・ステージの主語（概念化の対象）の移動について言及するものである、という点である。つまり、“來去”の概念において、移動者になるのは〈発話者＋主語〉である。そこで、基本的に主語の人称によってその発話についての解釈が勧誘か意志かに分かれる。ただし、“來去”の概念における勧誘と意志の意味は連続的であり、両者の中間事例も多い。

本稿の考察から、台湾語の“來去 (lâi-khi)”の概念を次のように定義する。すなわち、「元の場所から離れて、(どこかへ/何かをしに) 向かって行く」という物理的移動を行おう、という発話者からの勧誘や発話者の意志)である。つまり、“來去”は〈去 (khi)”の物理的移動＋発話者の勧誘・意志〉という概念を持つゲシュタルトなのである。

【参考文献】

- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 教育部2011.『臺灣閩南語常用詞辭典』中華民國 100年7月臺灣學術網路正式版，
http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/index.html，臺北：教育部國語推行委員會。
(閲覽日：2016/03/11)
- Siewierska, Anna. 2004. *Person*. New York: Cambridge University Press.
- 陳修(編著)2000.『臺灣話大詞典(二版)』臺北：遠流出版。
- 村上嘉英(編著)2007.『東方台灣語辭典』東京：東方書店。
- 劉綺紋2016.「台湾語の“來去(LÂI-KHÌ)”と主体化(上)」『名古屋外国語大学
外国語学部紀要』50: 133-165.
- 盧廣誠2003.『台灣閩南語概要』臺北：南天書局。
- 盧廣誠(編著)2011.『實用台語詞典』臺北：文水出版社。

【用例出典】(下線部は略記号)

《CDブック》

- 林振生(主編)2008.『給孩子們的世界童話 台語有聲書』臺北：寶島新聲廣播電
台FM98.5。
- 「傑克與魔豆」『給孩子們的世界童話 台語有聲書』pp. 89-109.
- 「桃太郎」『給孩子們的世界童話 台語有聲書』pp. 45-66.

《歌》

「一百萬」(歌手:新寶島康樂隊,作詞:陳昇,作曲:陳昇)『新寶島康樂隊』臺北:滾石唱片,1992.

「環島旅行(北)」(歌手:施文彬,填詞:武雄,作曲:施文彬)『環島旅行』臺北:亂音製作,2011.

「向前走」(歌手:林強,作詞:林強,作曲:林強)『向前走』臺北:滾石唱片,1990.

「煞到妳」(歌手:伍佰,作詞:伍佰,作曲:伍佰)『樹枝孤鳥』臺北:魔岩唱片,1998.

「唱一首歌」(歌手:王俊傑,作詞:王俊傑,作曲:王俊傑)『幸福佇佗找』臺北:馬拉音樂,2012.

「來去夏威夷」(歌手:金門王&李炳輝,作詞:金之助,作曲:吳俊霖)『來去夏威夷』臺北:魔岩唱片,1999.

「來去艋舺」(歌手:余天龍,作詞:高以德,作曲:余瑞昌)『來去艋舺』臺北:華特唱片,2013.

「來去台東」(歌手:沈文程,作詞:沈文程,作曲:沈文程)『愛的日記』新台唱片,1992.